

唐王朝の官僚制と北衙禁軍

——唐前半期を中心に——

林 美希

はじめに

中国では古来、官僚制が発達し、古くは『周礼』に既に天・地・春・夏・秋・冬官の六官制の構造が記されている。それが秦・漢を経て、唐の時代にはいっそう高度に発展し、日本をはじめとする東アジア諸国の初期国家体制に影響を与えた。中国王朝によって布かれた官僚制は、しばしばその統治範囲内に含まれる多くの民族にも適用され、国の根幹をなす政治制度として運営された。しかしながら、そうはいっても王朝が漢族と非漢族の複合体である場合には、当然ながら、その両者に対する統治方法は一元的ではありえなかった。このように、皇帝を頂点とする官僚制によって国を統治しながらも、領域内の複数の民族に対する支配方法が一元的でない形態を〈帝国〉と呼んでよいのであれば、唐の前半期はまさしく帝国の様相を呈する。

それならば、唐の統治システムの中心となった官僚制とは、いかなる構造を持っていたのであろうか。また、その帝國的支配体制を支えたものは、いったいなんだったのであろうか。さらに、唐による複合的な統治は、どのような方法でなされたのであろうか。

本稿では、このような疑問に答えるために以下の三点について概観する。まず、唐王朝の官僚制度について、大枠をごく簡単に確認する。唐の官僚制は律令によって規定されていたが、律令制といえば、わが国でも奈良時代・平安時代に類似の体制として根づいた歴史があり、また現代日本の中央省庁のありかたは、その起源をさかのぼると唐の官僚制がモデルになっている。唐の官僚制は、我々にとっても馴染みのある制度なのである。

次に、〈帝国〉としての唐を支えた要素のひとつとして、軍事力に焦点をあてる。唐朝はしばしば「唐帝国」と称されるが、唐が、とりわけその前半期に、対外的な軍事遠征によって領域を拡大し帝國的支配体制を築いた背景には、強大な

軍事力があつた。現在の国際情勢にも如実に反映されているように、いつの時代も軍事力は、「国」の強さを決定づける大きな要素である。国家の保持する軍事力といっても多岐にわたるが、本稿ではそのうち、唐の軍事力の中核をなす皇帝近衛兵団・北衙禁軍（北衙）と、その軍馬を考察する。

そして最後に、唐朝最大の戦乱である「安史の乱」（755-763）を取りあげる。唐が〈帝国〉の体制を放棄せざるをえなくなったこの動乱の背景を追いつつ、唐王朝はいかにして帝国のシステムを作りあげていたのか、そしてそれはなにゆえ崩壊したのか、という点に迫ってみたい。

1. 唐の官僚制とは

(1) 律令官制と使職

唐という時代は、中国文学の分野では四期（初唐・盛唐・中唐・晩唐）に区分されるが、歴史の分野では一般に、安史の乱を境に前期・後期に分けられる。戦乱以前と以降とは、唐の国家としてのありかたは大きく変化し、安史の乱を乗り越えたのちの唐は、もはや帝国とは呼べない。したがって本稿では、行論の都合上、このうちの唐の前半期、すなわち創業から安史の乱に至る約140年間に焦点を当てることにする。

さて、唐代の特色を表す際に、「律令体制」や「律令国家」という言葉がよく用いられるが、唐の国家は一般に、律（刑法）・令（行政法）という法体系のもと、租庸調制、均田制、府兵制という三本の大きな柱によって支えられ、それらの上に展開するのが律令官制と呼ばれる官僚システムであると考えられている（律令制下の官僚体系については文末【図1】参照）⁽¹⁾。この時代、政治の中枢に関わるには、九品制と称される一品から九品まで（正／従と、四品以下にはさらに上／下がある）、合計で30等級に分かれたこの身分体系の一員に加わっておく必要があつた。ただし一品・二品は名誉職で、中央官僚の頂点に君臨する宰相たちは、おおよそ三品の身分を有する。また、五品以上の高官と六品以下では待遇に大きな差があり、官僚としての区分は五品と六品の間に設けられていた。

このような一品から九品までの官品は、四系統の「身分」（階官）によって表示される。それが、散官・職事官・封爵・勲官と呼ばれるものである。散官とは序列、つまり自らのランクを示すもので、文散官・武散官の別があり、官僚の俸禄特典・儀礼服飾などの基準となつた。職事官は、実際に担当する職務のことで、原則として、散官の品階に基づくポストが与えられた（たとえば、三品の文散官を有する者には、三品相当の職事官が与えられる）。これら四系統の階官の中心となつたのは「散官」と「職事官」で、散官は職務遂行後の考課（人事評

価)によって昇格するため、さらなる上級職への昇進には、職事官での任務遂行が必要であった。

一方、封爵と勲官はこの二官から独立した形で存在していた。封爵は、皇族や功臣に与えられる爵位(王・公・侯・伯・子・男)で、経済的な特典として食封(一定の土地からあがる税収入)が付与された。勲官とは、兵士の軍功に対して与えられたことを始まりとする⁽²⁾。したがって、一度官僚になった者であれば必ず散官を有しており、現役官僚ならばさらに職事官を有する。それ以上は、個々人の出身や功績に基づく部分が多く、身分が高い者ほど保持する階官の種類も増える傾向にあると考えてよい。

さらに、王朝も半ばを過ぎると、この官僚体系に「使職」という令外官が加わる。使職とは、国内のさまざまな事態に律令官制のシステムでは対応しきれなくなってゆく時代の中で、状況に臨機応変に対応できるよう臨時に置かれた皇帝直属のポストで、「〇〇使」という名称を持つ官職の総称である。令外官であるから、それ自体に官品は附されていないが、「節度使」のように制度化していくものも多く、唐の後半期には、実際にどのような職務についているかというのは、職事官よりもむしろ使職でもって示された。

では次に、唐の中央官庁体制を見てみたい。この体制は「三省六部」と称されるが、三省とは、門下省・中書省・尚書省で、大まかにいえば、門下省と中書省とで政策を決定し、それをうけて実際に動くのが尚書省という分担になっている。ただし、尚書省六部は、上申されてくる書類の最終決裁を行う機関であって、六部の配下にはさらに各部と連携して動く下部組織がある(文末【図2】の九寺五監一台十六衛⁽³⁾)。これらの下部組織をまとめて今、仮に「中央実務機関」と呼んでおくと、それら中央実務機関たる各官庁も、単独で職務を遂行しているわけではなく、それぞれ地方に置かれた役所(地方実務機関)と連携して仕事にあたっている。

したがって、地方から中央への行政のフローチャートは、以下のような流れをたどる。「九寺」の一つ、太僕寺を例にとってみよう。太僕寺は唐国内の馬を管轄する中央実務機関で、地方に配備された官営牧場「監牧」を統括する立場にある。地方実務機関である監牧からは毎年、馬が中央に送られるが、それだけではなく、当然さまざまな文書が送付されてくる。それらがどのように処理されるのかというと、まずは直属の上司である太僕寺がそれを受け取り、さらに上の判断を仰がなくてはならない場合は、六部のうちの尚書兵部に書類が回される。同じく、火急の用ではない報告書類なども当然、監牧から太僕寺へ、そして尚書兵部へと回され、裁可される。このように、中央の尚書六部と配下の実務機関、そして地方の役所が結びついて行政は運営されているのである。

(2) 仕官への道——恩蔭か科挙か

唐の官僚登用制度は、「恩蔭」と「科挙」の二種類に大別される。唐前半期に主流であったのが前者で、後半期には次第に後者が主流となった。唐の官僚（一品から九品までの職事官）の総数は、玄宗開元年間には約18,000名であり、文官が約80%を占めている。しかも彼ら「官僚」の下には、「胥吏」と呼ばれる官品を持たない下級役人が無数に存在し、行政の末端を担っていたので、たとえ官僚ピラミッドの一番下位に位置する九品官僚であったとしても、この18,000名のうちに含まれるということは、皆、立派な国家のエリート公務員であったと考えてよい。さらに、18,000名のうち、都で勤務する中央官（京官）は2,600余名、五品以上の高級官僚に限ればわずか390名である。唐の都・長安の人口が約80万人であったことを考えると、この時代、官僚であることがどれほど特権的であったのかがよく理解される⁽⁴⁾。

恩蔭とは、父・祖父の散官に応じて子・孫に官位を与える制度で、五品以上の官僚の子と孫に適用される。これによって官僚二世や三世たちは、一般官僚よりも高いランクからキャリアをスタートすることができるのである。一方、科挙とは、複数回の試験による選抜を経て就官する方法である。科挙を受験するには、国子学などの中央の国立学校に入ってその資格を得るか、地方での試験に合格して郷貢となるか、の二通りのコースがある。とはいっても、国立学校への入学には身分による制限が存在したため、大多数の受験者は、郷貢となって上京してくるのが普通であった。都では年に一度、尚書礼部が管轄する礼部試が行われる。これはいわば高等文官になるための資格試験のようなものであり、四書五経を中心とした基本的な素養が試される。これを通過すると、今度は尚書吏部が管轄する吏部試に進む。科目は身（容貌風采）・言（言葉遣い）・書（楷書体）・判（判決文）の四科目である。これに合格すると皇帝への拝謁があって、晴れて官職が得られるわけである⁽⁵⁾。

ところで、これまで見てきたシステムは、官僚の中でも主として文官に適用される。それならば、官僚制とともに国家を維持するために不可欠な要素である軍事力は、どのようなシステムで運営されていたのであろうか。

唐王朝の軍事力というと、一般には「府兵制」で運用されていたと考えられている。それは、全国各地で農民が徴兵されて最寄りの折衝府に召集され、訓練を受けたのち、折衝府から1ヵ月交代の五番制で上京し（これを上番という）、南衙に勤務して都の警備などにあたるという制度である⁽⁶⁾。南衙とは、唐代前期のいわゆる国家軍で、【図2】でいうと最下段左端の「十六衛」がそれにあたる。しかしながら、上記のようないわば農民を寄せ集めた軍隊で、帝国が維持できていたとは到底思えない。実のところ唐は、律令制の原則で国家を動かしつつ、よ

りフレキシブルに軍事力を運用しており、軍隊としてはむしろそちらが主力であった。このことはもっと注目されてよい。そのひとつに、「北衛禁軍」と称される皇帝近衛兵団がある。次はこの北衛と、それが果たした役割について見てみよう。

2. 唐代前期の北衛禁軍

(1) 北衛の発展と宮廷政変

北衛禁軍（単に「北衛」ともいう）とは、第二代皇帝・太宗の時に誕生した皇帝親衛軍の総称で、唐代前期に拡大を重ね、玄宗期には北門四軍といって、左右羽林軍と左右龍武軍とがそれにあたる。彼らは、唐の都（長安・洛陽）の宮城北門である玄武門に勤務している（玄武門の位置は文末【図3】参照）。これに対して、府兵制によって運営される国家軍を南衛という。都に駐屯する軍隊はこの北衛・南衛の二種類であるが、国家軍たる南衛は当然、北衛に比べて兵員数も多く、宮城の玄武門以外の場所は南衛の兵士が分担して警備にあっていた。長安に勤務していた南衛兵は、常時およそ5～6万人と考えられている。

唐の前半期といえば、「貞観の治」・「開元の治」で知られるように、国が平和で安定していたという印象を受けるかもしれない。それは必ずしも正しくないわけではないが、この時期の政治史を宮廷政変という角度から見ると、初代皇帝・高祖から玄宗の即位まで続く7人の皇帝の治世にあたる約100年間、中央政界は常に揺れ動いていた。この時期に中央政界が混乱した原因は、要するに、「次の皇帝は誰なのか」という後継者争いにあった。下記【表1】にアルファベットのA～Fで示した6度の宮廷政変はすべて、皇位継承をめぐる熾烈な宮廷抗争であるという点で共通する。皇帝が宮廷クーデタによって交代していくという現象こそが、この時期の政治史の大きな特徴のひとつなのである。

唐皇帝	高祖	太宗	高宗	武則天	中宗	睿宗	玄宗
羽林軍（宿衛兵）		左右屯營	左右羽林軍				
龍武軍（護衛兵）		百騎		千騎	左右万騎		左右龍武軍
宮廷政変		A		B	C D	E	F

（A 玄武門の変、B 中宗廃位の変、C 誅張易之兄弟の変、D 李重俊の乱、
E 誅韋后一派の変、F 誅太平公主一派の変）

【表1】前期北衛の発展と宮廷政変

では、宮廷政変と北衛とは、どのような関係にあったのだろうか。実は、北衛は、「玄武門の変（政変A）」を除いた5度の政変に深く関与している。というの

も、北衙は政変のたびに相手方を倒す武力として利用され、しかもそのことによって体制を拡大するからである。唐代前期の政変は、ある意味では非常に単純で、対立陣営を物理的に殲滅する方向で展開され、最終的には武力衝突で決着がつくのが特徴であるが、その際には、北衙を掌握した側が勝利する、というセオリーが存在する⁽⁷⁾。

ここでさらに注目すべきなのは、北衙の内部はふたつの系統に分かれており、それぞれが別個の役割を担っていたという点である。左右羽林軍と左右龍武軍とは、いずれも同じく近衛兵ではあるが、職務によって以下のように区別されていた。羽林軍（宿衛兵系統）は宮城北門に駐屯し、王宮の北辺防御を担当する北衙本隊である。一方、龍武軍（護衛兵系統）は、皇帝の行幸時に身辺警護を担当する特別精鋭部隊で、羽林軍の兵士から選抜された。元来の呼称を「百騎」といい、次第に拡大されて千騎、万騎と改称を重ね、玄宗期に龍武軍という名を賜ったものである。そのため、彼らは本来、羽林軍所属ではあるものの、ある程度独立して活動を行うこともあった。この羽林軍と龍武軍のライバル関係が、宮廷政変に決定的な影響を与えたのである。つまり北衙が宮廷政変に利用されるといっても、単に北衙を掌握するのみでは不十分で、北衙内部で優位に立っていた部隊、すなわち少しずつのしあがってくる「龍武軍」（百騎→千騎→左右万騎）の方をどう指揮するかに、政変の勝敗がかかっていた、と見なくてはならない⁽⁸⁾。

さて、唐代前期の政治史はこのようにして、北衙の発展と宮廷政変の連鎖を背景に展開していくのであるが、この北衙という軍隊の主力は騎兵であった。そこで次に、北衙との関わりから、彼らの「馬」について見てみたい。

(2) 閑厩への馬の上納

およそ前近代、銃火器や蒸気機関が登場する以前の時代において、「馬」という動物は、陸上をゆく最速の移動手段であると同時に、強力な兵器でもあった。当時の馬は、現代の我々にとっての自動車のような存在だと考えてもらえばイメージしやすいだろう。乗用車はもちろんのこと、トラック、ジープ、トラクター、戦車、これらすべての役割を馬が担ったのである。したがって、歴代の中国王朝にとっても、馬は、国家の軍事力を左右する最大の要素であり、馬をどのように確保し運用するかというのは、重要な政治課題となった。なかでも唐は、外来種の積極的な輸入と国内での交配によって、馬の増産に大きな成功を収めた王朝で、王朝所有の馬は、官営牧場である「監牧」か、皇帝専用牧場である「閑厩」のいずれかで管理されていた。

閑厩とは、皇帝および宮廷が使用する馬を、「繫飼」を中心に飼養する施設のことである。これに対して、隴右地方を中心に唐全土に設置された、主に放牧に

よって馬を育成する牧場を監牧という。閑厩の馬はその一部が北衙に供給され、兵士の騎乗するところとなった。北衙は、太宗期に少人数の騎馬隊として誕生するので、次第に兵員が増え、軍隊としての規模が拡大しても、やはり騎兵に主力が置かれた。しかも北衙は皇帝の近衛兵であるから、彼らに与えられる馬も、国内では最も良質な閑厩の馬であった。では、閑厩で飼われる馬は、どこから供給されるのであろうか。

当時、保有する馬の多少と良馬の確保は、国家の存亡に関わる大問題であったことは既に述べたが、最も重要なのは、いかにして良質な馬を中央に吸い上げるか、という点である。唐王朝では毎年、馬は地方の監牧から選抜されて中央の閑厩に送られる。この一連の手続きを便宜上「上納」と呼ぶが、この上納は、どのように行われるのだろうか。

唐の律令の「令」には、馬やその他の畜産に関する条文をまとめた「厩牧令」という一篇がある。今、北宋『天聖令』中に残された唐令によって、監牧の馬の品質と規模についての規定を見てみると、監牧は、扱う馬の品質によって「左監」・「右監」に分類され、設置順に番号が振られた。また牧場の規模は、3歳以上の馬の飼育頭数によって上・中・下と区分がなされたことが分かる⁽⁹⁾。

馬の飼育についてはどのような規定があったのだろうか。同じく「天聖厩牧令」によれば、仔馬が誕生した場合、牡馬なら2歳までは母馬の群れで育てて3歳で離し、牝馬ならそのまま母馬と共に育て、4歳から交配を開始せよ、とある。馬の出産頭数は厳しく管理されており、毎年、ひとつの牧場が飼育する5歳から20歳の牝馬に対して、60%以上の出産率が義務づけられていた。つまり牝馬100頭当たり、仔馬60匹以上の出産が課されたことになる⁽¹⁰⁾。この基準に達していなかったり、規定より多く馬を死なせたりすると、牧場を管理する役人に罰則があった。より厳密に、より効率的に、良馬を生産しようとする唐王朝の姿勢をうかがうことができよう。

今、問題にしている中央への馬の上納は、3歳以上の馬が対象となる。上納のために、馬は何段階にも選抜され、審査の過程で「馬印」（焼印）が捺された。今は、北衙との関係から、彼らが騎乗する閑厩馬の選抜のみに焦点を絞って述べるが、最終的に、閑厩馬として選ばれた馬には、すべての馬に押される官有を示す「小官字印」と生まれ年を表す「年辰印」のほかに、「飛」字印と「三花」の合計四種類が捺されることになる。「飛」と「三花」が、国中で最も厳しい選抜を勝ち抜いたあかしというわけである⁽¹¹⁾。

では、今度は視野をもう少し広げて、北衙の機能と、それが唐の帝国としての体制を維持するために果たした役割について見てみよう。

3. 帝國的支配体制の崩壊

(1) 羈縻政策と蕃將——安史の乱の背景

そもそも唐といえは、シルクロード由来のエキゾチックな文化に代表される、国際色豊かな時代としてよく知られている。こうした特色は、唐が西方・北方に版図を拡大し、羈縻政策によって周辺の異民族を取り込んで、緩やかな帝國的支配体制を作り上げたことと密接な関係にあった。唐は、服属してきた突厥などの北方遊牧民を、みずからの軍事力に積極的に組み入れて活用したため、唐では多くの「蕃將」と呼ばれる非漢族出身の武將たちが活躍した⁽¹²⁾。

唐は、どのようにして周辺の民族を自国の軍事力に取り込んだのであろうか。唐に帰属してきた各部族の部族長たち（彼らの多くは唐に入って蕃將と呼ばれる）は元来、各自が、自分の部族の者からなる騎馬兵を従えている。この時代、世界最強の軍隊は、遊牧民の擁する騎馬兵であった。それゆえ、唐側の思惑としては、強力な異民族騎馬軍団を配下に持つ蕃將を、なるべく自分たちに引きつけて利用したいと思っていたはずである。そこで唐は、このような蕃將たちに將軍職を与えて彼らをコントロールしようとした。その際、蕃將にとって最も価値が高かったのが、中央の禁衛將軍号のうち、北衙のそれであった。なぜなら、北衙というのはつまり、皇帝直属の私的な側近兵であり、そして君主と個人的に親密であるという榮譽こそが、北方遊牧民にとっては君臣関係を強固にするうえで最も重視されたからである。北衙は、唐の軍事力の要である蕃將たちを、皇帝と直接かつ密に結びつける場となっていたのである。

ところが、時代が下って皇帝が代替わりし、蕃將も代替わりが進むと、この体制は次第に機能しなくなってゆく。その原因は大きく分けて二つある。まずひとつは、辺境に長期間赴任し、フロンティア戦線を守る軍事職「節度使」の登場である。節度使が唐の西方・北方の「国境地帯」にベルト状に配置され、制度として定着してしまうと、中央政府は次第に、蕃將ばかりを節度使に任用するようになり、その結果、蕃將も彼らに率いられる配下の軍事力も、辺境地帯に固定されてしまった。蕃將と皇帝を中心とする中央政府との関係性は意図的に阻害され、急激に薄れたのである。もうひとつの理由は、北衙のシステムの変化である。前節で見たように、北衙の発展というのは、換言すれば龍武軍の発展であり、それは羽林軍本隊の衰退と表裏一体の関係にあった。北衙將軍となった蕃將は、ほとんど全員が羽林軍に所属しており、したがって羽林軍が勢力を失い、皇帝との紐帯を構築する力を喪失していくにつれて、蕃將が羽林軍に所属する意味も薄れていった。蕃將を北衙に起用して強力な軍事力を間接的に中央に吸い上げる、という唐初の体制は、ほとんど意味をなさなくなってしまったのである⁽¹³⁾。

そうして、このシステムが崩れたところに、かの有名な安史の乱が起こる。

(2) 「国際紛争」としての安史の乱

安史の乱とは、安祿山・史思明というふたりの首謀者を中心に引き起こされ、唐王朝を存亡の危機に陥れた大規模な戦乱である。安祿山はソグド人と突厥人のハーフであり、史思明はソグド人であった。この戦乱はこれまで、たとえば政治的に追いつめられた安祿山の決死の謀叛であるとか、安祿山と玄宗と楊貴妃の人間模様や、唐国内の内乱という角度から分析が進められてきた。けれども実は、安史の乱の本質はそのようなところではなく、安祿山の挙兵というのはひとつのトリガーである、と考えなくてはならない。安史の乱は、唐の辺境経営のバランス崩壊が火種となって勃発したもので、足かけ8年に及ぶ大混乱によって、唐はほとんど壊滅寸前にまで追い詰められた。結局、唐は、ウイグルからの援軍によって辛くも危機を脱し、それまでの〈帝国〉としての支配体制を放棄して、新たな体制での再出発をはかることになる⁽¹⁴⁾。

安史の乱がいかに国際紛争的であったか、ということは、戦況を分析すれば明らかである。戦乱では、安史軍側が幽州を本拠地として洛陽と長安を占領したのに対して、唐側は靈武（靈州）に本拠地を置き、両都の奪還を狙うという構図で、太原（晋陽）を境界として、東西から睨みあっている。つまりこの構図の要は太原である。唐朝廷は辛くも太原を安史軍の猛攻から守り抜き、靈武と太原を保持した状態で長安の奪回に乗り出した。いったん長安を奪回したあとは、安史軍は、幽州・太原・洛陽の三点で結ばれるゾーンを勢力範囲とし、唐側は長安・太原・靈州の三点を防衛ラインとし、戦況は膠着したまま泥沼化していく（文末【図4】参照）。そのような状況に加えて、靈州には北西方面から、幽州には北東方面から、唐の領域の外側から周辺の諸民族が「援軍」という形で流入する。たとえば、唐政府を危機一髪のところまで救援したのはウイグルであったし、一方の安史軍の主力は、契丹や奚、突厥第二可汗国の残党といった非漢族集団であった。このように見てくると、安史の乱というのは、戦乱の舞台こそ中国華北一帯ではあったが、その実態は、国内の内乱というよりはもっと大規模かつ「国」を超えた動き、すなわち、東ユーラシア全体を巻き込んだ民族移動が起こり、契丹・突厥・ウイグル・吐蕃など、さまざまな部族が唐の内地にどっと流れこんで、そこで紛争を繰り広げたと見るのが、おそらく実態に近いのではないかと考えられるのである⁽¹⁵⁾。

おわりに

最後に、安史の乱ののちの唐王朝について、簡潔にまとめておきたい。唐のコントロールから逃れた周辺の諸民族が、安史の乱に乗じて中国内地で暴れ回ったあと、唐にはもはや、〈帝国〉に戻る術は残されていなかった。その影響の及ぶ領域は大幅に縮小し、北方からはウイグルの、そして西方からは吐蕃の圧迫を受け続けることになる。時勢の変化に合わせて国家運営のシステムは再構築され、租庸調制と均田制に代わって両税法が、府兵制に代わって藩鎮体制が国を支える柱として登場する。そして、帝国を維持する鍵のひとつであった北衙禁軍もまた再建されて、前半期とは全く様相の異なる軍隊へと変貌を遂げる。

唐はその後も約150年存続するが、軍事力を背景にした帝国という姿から、農耕地域から生まれる財貨をいかに中央に集約するか、という経済的な側面の強い国家へと変容を余儀なくされた。それゆえ、安史の乱は民族問題から起こった戦乱であったのに対して、唐が滅亡する契機となった「黄巢の乱」は、塩の専売制に絡んだ、経済的な問題から起こった反乱の性格を持つのである。

注

- (1) 唐の官僚制については、礪波護『唐代政治社会史研究』（同朋舎、1986年）、同『唐の行政機構と官僚』（中央公論社、1998年）、同『唐宋の変革と官僚制』（中央公論社、2011年）等を参照。
- (2) 勳官は、功績ある一般民に賜与される称号で、賜与範囲が広がったためにインフレを起し、唐初を除いてほとんど恩典としての意味はないと考えられてきた。ただし、軍事的な側面に注意すると、「白丁」とは一線を画す地位を示す指標として機能していることが分かる。勳官については速水大『唐代勳官制度の研究』（汲古書院、2015年）を参照。
- (3) 九寺の「寺」とは寺院ではなく役所の意。
- (4) ここで示した官僚の数値については、氣賀澤保規『絢爛たる世界帝国——隋唐時代』（講談社、2005年）第四章、p.148にもとづく。
- (5) 科挙は隋代に発祥し、唐代に官僚の選抜制度として官界に根づくが、より一般的になるのは次の宋代以降とされる。宋代以降の科挙については、宮崎市定『科挙——中国の試験地獄』（中央公論新社、1963年）に詳しい。
- (6) 府兵制については氣賀澤保規『府兵制の研究』（同朋舎、1999年）を参照。
- (7) 拙稿「唐代前期宮廷政変をめぐる北衙の動向」（『史観』164、2011年）を参照。
- (8) 拙稿「唐代前期における北衙禁軍の展開と宮廷政変」（『史学雑誌』121-7、2012年）を参照。
- (9) 「諸牧、細馬・次馬監称左監、羸馬監称右監。仍各起第、一以次為名。馬滿五千匹以上為上〔数外孳生、計草父三歳以上、滿五千匹、即申所司、別置監〕。三千匹以上為中、不滿三千匹為下」（『天聖令』厩牧令、不行唐令第18条。録文は天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校証『天一閣藏明鈔本天聖令校

証 附唐令復原研究』中華書局、2006年の清本による。以下同じ)。

- (10) 「諸牧、牡駒・犢每三歲別群……其二歲以下並三歲牝駒・犢並共本群同放牧」(『天聖令』厩牧令、不行唐令第5条)、「諸牧、牝馬四歲遊牝、五歲責課」(同、不行唐令第6条)、「諸牧、牝馬一百匹、牡牛・驢各一百頭、毎年課駒・犢各六十〔其二十歲以上、不在課限。……〕」(同、不行唐令第7条)。
- (11) 拙稿「唐前半期の厩馬と馬印——馬の中央上納システム」(『東方学』127、2014年)を参照。
- (12) 本稿でいう蕃将とは、「非漢族出身で、唐の建国以後に帰属し、將軍等の高位武官職に就任した者」の総称。唐の蕃将については、谷口哲也「唐代前半期の蕃将」(『史朋』9、1987年)、馬馳『唐代蕃将(増補版)』(三秦出版社、2011年)等を参照。
- (13) 拙稿「唐代前期における蕃将の形態と北衙禁軍の推移」(『東洋史研究』75-4、2017年)を参照。
- (14) 安史の乱については、藤善真澄『安祿山——皇帝の座をうかがった男』(中央公論新社、2000年)、森部豊『安祿山——安史の乱を起こしたソグド人』(山川出版社、2013年)を参照。
- (15) 学会報告(林美希)「民族紛争としての安史の乱——幽州と靈州の間」(中央アジア学フォーラム、2017年3月25日、大阪大学)。

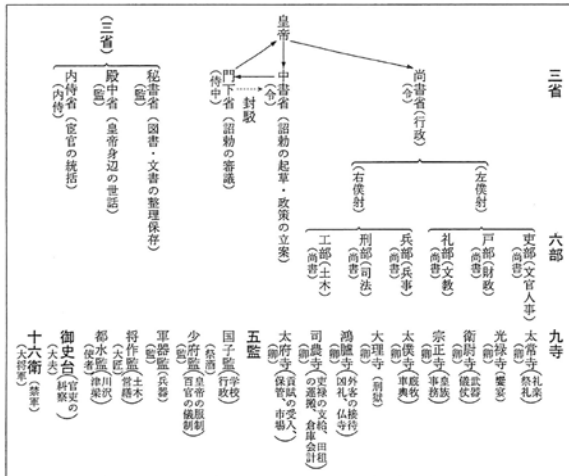
【附記】本稿は、平成29年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による成果の一部である。

唐王朝の官僚制と北衙禁軍

品階	散官		職	爵	職事官 (各部門の最上位官を掲示)
	文散官	武散官			
正一品			尚書	公	(三卿三公)
從一品	開府儀同三司	驍騎大將軍	尚書	侯王	太子三少
正二品	特進	輔國大將軍	上柱國	侯	(尚書令)
從二品	光祿大夫	領國大將軍	柱國	侯	尚書僕射 都督(上)
正三品	金紫光祿大夫	冠軍大將軍	上護軍	侯	尚書 門下侍中 中書令 御史大夫 大將軍(禁軍)
從三品	監青光祿大夫	兼地將軍	將軍	侯	教習 祭酒 監 御史大夫 傅(親王) 國子祭酒 刺史(上)
正四品上	正議大夫	忠武將軍	上柱國	侯	折衝都尉(上)
正四品下	通議大夫	壯武將軍			
從四品上	大中大夫	宣威將軍	輕車都尉		內侍
從四品下	中大夫	明威將軍			
正五品上	中散大夫	定遠將軍	上騎都尉	侯	通舍(上)
正五品下	朝議大夫	寧遠將軍			
從五品上	朝議大夫	審察將軍	騎都尉	侯	
從五品下	朝議大夫	審察將軍			
正六品上	朝議大夫	昭武校尉	騎都尉		
正六品下	朝議大夫	昭武校尉			
從六品上	朝議大夫	昭武校尉	騎都尉		
從六品下	朝議大夫	昭武校尉			
正七品上	朝議大夫	昭武校尉	騎都尉		
正七品下	朝議大夫	昭武校尉			
從七品上	朝議大夫	昭武校尉	騎都尉		
從七品下	朝議大夫	昭武校尉			
正八品上	朝議大夫	昭武校尉			
正八品下	朝議大夫	昭武校尉			
從八品上	朝議大夫	昭武校尉			
從八品下	朝議大夫	昭武校尉			
正九品上	朝議大夫	昭武校尉			
正九品下	朝議大夫	昭武校尉			
從九品上	朝議大夫	昭武校尉			
從九品下	朝議大夫	昭武校尉			
					遼外官 (薄吏)

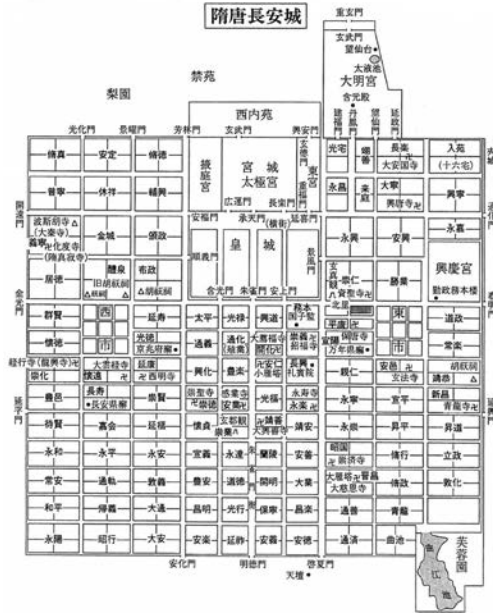
【図1】九品制の官僚ピラミッド

(氣賀澤保規『絢爛たる世界帝国 隋唐時代』講談社、2005年、p.145を転載)



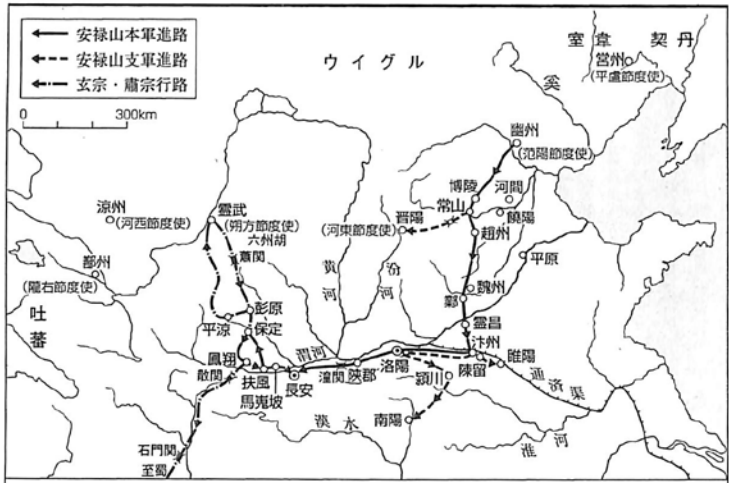
【図2】唐王朝の中央官制

(氣賀澤保規『絢爛たる世界帝国 隋唐時代』講談社、2005年、p.147を転載)



【図3】唐長安城

(氣賀澤保規『絢爛たる世界帝国 隋唐時代』講談社、2005年、p.200を転載)



【図4】安史の乱の際の進軍経路

(森部豊『安禄山』山川出版社、2013年、p.67を転載)

The Bureaucracy and the Imperial Force during the Early Tang

HAYASHI Miki

In Imperial China, they traditionally had a highly developed bureaucracy, and during the Tang dynasty it improved more systematically known as the political system based on the *ritsuryō* code 律令制. The Tang, especially in their early period, is generally referred to as the Tang Empire, because it consisted of different kinds of ethnic groups. As an empire, how did the Tang dynasty rule over their territory?

To approach this simple but difficult question, this article offers the following three topics: at first, we look at how the Tang's bureaucratic system worked, then we confirm what was the core of the military strength underpinning the prosperity of the Empire, and finally we focus on the An-Shi Rebellion in order to clarify the key of the empire system and the reason why 'the empire' broke down.

The keystone of the Chinese bureaucracy was the organization and the selection of bureaucrats. During the Tang, for the former the system of Nine Ranks 九品制 was brought in and for the latter Hereditary by Grace 恩蔭 and Recruitment by Examination 科挙 was used. However, on the military plane, the Tang court did not apply their systems precisely; in fact the military strength of the Tang was maintained by the power outside of their bureaucratic system. The *Beiya* 北衙, the imperial force of the Tang, was one example. The most distinctive elements of the *Beiya* was used and developed by the coups. Most of them were cavalymen, therefore the more they were expanded, the more the Palace Stables 閑廐 which provided them horses were expanded. Furthermore, the *Beiya* had a role that maintained the strong relationship between the Tang emperor and the Non-Han generals 蕃將. The Non-Han generals were an issue of national significance because in those days they and their soldiers were the strongest all over the world. Unfortunately, the system of the *Beiya* was changed, and it did not work for the Non-Han generals. As a result, the Non-Han generals and their soldiers remained on the frontier as Military Commissioners 節度使, and this situation came to be the cause of the An-Shi Rebellion.